

今、振り返る教師としての原点

私を育てた
あの時代、あの出会い

理想の教師像に出会った



教職5年目
に、2校目の勤務校として熊本
県立熊本高校に

赴任しました。全国有数の進学校に勤めることになった私に、周囲は「熊高では、自分の小さな物差しにこだわらず、先輩から学ぶ素直さが大切」とアドバイスしてくれました。私は「自分は経験が乏しいのだから、分からないことはどんどん聞く」と心に誓いました。

実際、1年目から大いに鍛えられました。熊本高校では、所属学年に関係なく、3年生の内模試の作問を年に数回担当することになっており、それが「熊

豊かな師弟関係が 伝統校の文化を継承する

熊本県立熊本高校 原田大賢

全ての学校には、それぞれに果たすべき使命がある。そして、それを途切れることなく伝えていく教師の存在があつてはじめて、使命は文化となって校内に根付いていく。先輩から全てを学ぶことを決意した原田先生が、文化を継承した10年を振り返り、次代に伝える決意を語る。

高の教師」としての登壇門になっていきます。翻訳が出ていない英文を素材に、全くオリジナルの問題を作成するのは非常に大変で、2学年担任となった私も4月から早速作問に取り組みましたが、指導役の先輩に何度もやり直しを命じられました。

英語科全体での検討会に提出できるレベルの問題になるまでに約1か月掛かり、この間に体重は5キロ減りました。

作問に加えて日々の教材研究、更には部活動の指導と、仕事は山積みでしたが、そのような状況の中で精神的な支柱となってくださったのが、2学年主任だった山本朝昭先生です。教科指導と進路指導の両方で生徒の熱烈な支持を集める山

本先生の周りにはいつも生徒がいて、どんな相談にも的確なアドバイスをされていました。また先生は、校外の研究会にも積極的に参加して人脈を広げるなど、何でもスマートフォンにこなせる先輩でした。私はよく生徒に「熊高では勉強だけではダメ。あれもこれもと欲張ろう」と話していました。山本先生は私にとって理想の熊本高校の教師像だったのです。私はすぐに「山本先生についていこう」と思うようになりまし。職員室では、隣席の山本先生が生徒に掛ける言葉に耳を傾け、指導の真似をすることから始めました。

先輩に学んだから今がある

「仕事と宴席は断らない」。こ

れは当時も今も変わらない私の信念です。どちらも声を掛けてもらえることがありがたいですし、断ってしまうと自分の小さな枠の中でしか成長できなくなると思うからです。

とはいえ、全てに自信を持って臨んでいたわけではありませんが、赴任1年目の終盤、次年度校内人事の希望調査の際には、私は3年生の担任を望んではいませんが、その重責に不安を感じ、希望するかどうか躊躇していました。そんな私に山本先生は、「3学年担任が希望だと書いたらいいよ」と背中を押してくださいました。山本先生は、私に経験が乏しいことを承知の上で仕事を与えようとしてくれる。だったらやるしかない

先輩教師の言葉

先輩から学ぶ
若手の姿勢が
学校文化を継承する

熊本県立済々黌高校 副校長
山本朝昭



赴任1年目
から2学年担任となった原
田先生には、

周囲の思いを察知して先回りして動いてくれる行動力がありませんでした。それでも、赴任して最初の1、2年は苦労したことでしようが、原田先生は用意されたハードルを越えるのが早かったと思います。校内模試の作問に取り組んでいる時も、原田先生の表情には悲壮感などなくエネルギーッシュで、むしろ新しい環境での挑戦を楽しんでいる印象さえありました。

赴任2年目に3学年担任になるのは、熊本高校ではあまり例のないことではありましたが、原田先生には伸びしろがありましたし、次代の熊本高校を担う人材づくりのため

左はらだ・だいけん 英語科。熊本県立河浦高校を経て、熊本高校へ。赴任10年目。英語科主任。進路指導部副部長。

右やまもと・のりあき 英語科。熊本県立八代高校、熊本高校などを経て、高森高校で教頭を務める。その後、済々養高校へ。副校長。

撮影◎熊本高校にて



し、やる以上は先輩の顔に泥を塗るわけにはいかない。そう思いました。

3 学年担任としての1年間は分からないことの連続で、先輩方に聞いてばかりでした。もちろん、教わったことは自分の頭で理解した上で生徒に伝えようとなりましたが、それでもどこか自分の言葉ではないという気がすることもありました。今思えば

十分な指導力があつたとはいえず、きっと生徒にも苦勞を掛けた1年だったと思います。

しかしそのおかげで、翌年度に1学年担任になった私は、3年生像をリアルにイメージしながら「熊高での3年間」を自分の言葉で生徒に語っていました。「一緒に3年生に上がろう」と声を掛けてくださった山本先生は、私に熊本高校の教師として

成長する場を与えてくれたのだと感謝しました。

10年前、「ここでは教師も自ら学ばなければいけない」という言葉を胸に、私は熊本高校に來ました。若かった私がやっていくためには、先輩方に多くを尋ねることが必要でした。山本先生を始め、多くの先生方の姿を追い、その言葉を聞き逃さぬようにしてきたことで、今の私

があるのだと思います。

社会が変化し、校務も多様化しているからこそ、不易と流行にも先輩から学ぶ姿勢は一層大切になっていると思います。熊本高校の生徒、そして教師はどうあるべきか、今は自分が若い先生方にいろいろなシーンで伝えていく立場になったのだと、その責任を実感しています。

にも早めに大きな役目を経験した方が良いと考えました。

とはいえ、教師にとって大切なのは目の前の生徒であり、生徒は教師の成長を待つてはくれません。学校はその時その時が勝負で、やり直しが利くものではありません。だから若手は、経験から学ぶことが出来ないのであれば、先輩から学ぶしかないのです。「経験を待たずに分かる力」を既に持っていた原田先生に、更に大きく育つために経験も早く積ませたいと思ったのかも知れません。

生徒は、手を掛ければよいというものではなく、度が過ぎるとかえって大きく育たない生徒もいます。そのような生徒に対しては、最初から手を掛け過ぎず、見守り、待つことが大切です。もちろん、ぐいぐいと引つ張り上げることで大きく育つ生徒もいますから、教師には、生徒の状況を見抜く力、指導のさじ加減が求められます。そうしたセンス、力は「こうすれば身に付く」と言語化できるものではなく、先輩を見たり、感じたりして獲得するものではないでしょうか。そうした一人ひとりの営みが、学校文化を継承していくのだと思います。